

ファンドレイジングングとしてのスポーツ



筑波大学体育系助教
醍醐笑部

これまであまり関連があると思われていなかったスポーツと非営利団体などの活動。しかし、スポーツがそうした団体の資金調達に一役をかう事例が増えている。スポーツと社会の新しい関わり方の一面について解説をいただいた。

はじめに

多くの方にとって「ファンドレイジング」や「ファンドレイザー」は、聞きなれない言葉かもしれない。ファンドレイジングとは田尾・吉田（二〇〇九）によると「サービスマ提供の対価を得る活動以外で非営利組織が財源確保を目的に行う諸活動である」と定義されており、広くはこうした活動を個人にも適用した「意思ある資金の調達」と考えられている。つまりファンドレイジングとは、簡単にいえば資金調達をさす言葉であるが、もつとも広い定義では売上などの事業収入や銀行からの融資なども含まれることになるだけでなく、カタカナで「ファンドレイジング」を用いることで、資金の獲得だけではないより社会

的インパクトをもたらすことができるというイメージが強調されている。国内では、二〇〇九年に日本ファンドレイジング協会が設立され、ファンドレイザーの資格認定制度が始まるなど、さまざまな活動が体系化され、組織が構築されつつあるといえる。

ファンドレイジングに関する研究は、市民活動団体・慈善団体などの資金調達に関する研究としてNPO研究や市民社会論の文脈において議論されてきた。近年はとくに、組織的かつ能動的な働きかけが有用であるとされ、ファンドレイジングという言葉がNPOなど市民社会組織関係者を中心に活発に使われるようになってきている。

に対応する活動を行うことを期待され、そのための資金が十分に獲得できていないという問題がある。さまざまな社会課題が生まれ、認知される中で、すべての社会課題に公的財源からは支出できないだけでなく、非営利組織間の資金獲得に競争が生まれている。そのため団体や組織は、活動を充実させるため参加者、関与者を増やす必要が出てきている。つまり資金獲得につながるプロセスの中で、参加者を増やすことができれば、単に資金を集める以上の価値があるといえる。その装置の一つにスポーツがある、というわけだ。

スポーツとファンドレイジング

スポーツとの関わりを考えると、「スポーツのためのファンドレイジング」と「スポーツを活用したファンドレイジング」が存在している。前者は、スポーツ団体や組織の資金調達を主目的として行われるファンドレイズであり、スポーツ施設やクラブ、団体などの運営費（活動費や人件費）にその資金が充てられる。とくに、障がい者スポーツやマイナースポーツ、その地

だいで・えへ

早稲田大学スポーツ科学研究科博士後期課程修士、博士（スポーツ科学）。専門はスポーツ経営学。学位取得後、オーストラリアにあるグリフィス大学に研究員として在籍し、スポーツと寄付に関する研究活動を開始。早稲田大学（スポーツ科学）学術院助教を経て、二〇二〇年三月より現職。これまで日本体育・スポーツ経営学会奨励賞（二〇一六年度）、オーストラリアニュージールランドスポーツマネジメント学会ベストレギュアワード（二〇一九年）、笹川スポーツ財団優秀研究賞（二〇一九年度）を受賞。

域の特色として扱われるスポーツ種目などでは、普及を目的とした事業費や、トップ選手の活動費用として集められることも多い。こうした場合、スポーツ領域に特化したファンドレイザー、つまり資金調達を専門とする職員の活躍が期待されている。前述の日本ファンドレイズ協会にはテーマ別のチャプターがあり、芸術分野ではアートチャプターがアートを取り巻くファンドレイジングに関する理解や意義を深めていくための活動を行っている。残念ながらスポーツチャプターは現時点では組織されていないが、大学チャプターの中では大学スポーツを活用したファンドレイズに関するテーマを取りあげており、スポーツ領域に精通したファンドレイザーも少しずつ増えていくものと思われる。

後者の「スポーツを活用したファンドレイジング」とは、社会課題への貢献を目的としてスポーツ関連のプロジェクトやイベントを採用し、資金調達の手段、啓蒙活動の一助としている事例である。震災支援や社会課題解決に寄与するアスリートによるチャリティ活動、チームやリーグの行うチャリティマッチやオークション、慈善団体が行うスポーツイベントなどがあげられる。こうした活動の歴史は長く、チャリティスポーツイベントの萌芽をみても、さまざまな慈善団体の主催するチャリティオークやチャリティランが各地で行われており、そこにはチャリティに積極的な人やイシューへの関心が高い人が集まっ